

(平成28年11月6日)

第20回 赤松小三郎研究会のご報告

日時 : H28. 10. 15 (土) 14:30~16:00
場所 : 東京・文京区民センター 3階A会議室
出席者 : 93名 (同窓生44名、一般49名)

◎講演会「薩摩から見た赤松小三郎」

講師：桐野作人 氏

今回は、文京区民センターで一般の方を含めて百名近くの大勢の参加のもと、講師に歴史作家の桐野作人氏をお迎えし、講演会「薩摩から見た赤松小三郎」を開いた。

<配布資料>

1. 本講演のレジメ (桐野作人氏作成)
2. 信濃毎日新聞記事～「赤松小三郎 幕府にも建白」

<内容>

- 赤松小三郎研究会 会長 丸山瑛一 より挨拶
- 関良基さんより 講師 桐野作人氏の紹介

○講演要旨

1. 新発見の赤松小三郎建白書 (盛岡藩京都藩邸公用日記) の意義

桐野氏は昨年、新たに赤松建白書 (いわゆる「建白七策」) の写しを盛岡藩京都藩邸の公用日記『慶応丁卯 (ていぼう) 雑記』慶応3年11月26日条 (もりおか歴史文化館収蔵) から発見した。内容は同時期の一次史料として既に知られている以下3点と同じである。

- (1) 「続再夢紀事 六」(越前藩松平家の公用日記) 慶応3年5月17日条 (写し)
- (2) 「鹿児島県史料 忠義公史料 四」426 (写し)
- (3) 「鹿児島県史料 玉里島津家史料 五」1658 (自筆) →レプリカを今年5月から上田城址公園内の赤松小三郎記念館で展示中

※薩摩藩に二点伝来している理由

- (3) は島津久光の手文庫として所蔵。久光は藩主忠義の父=国父として当時薩摩藩の最高実力者であり、重要情報は自ずと集まった。
- (2) は (1) 越前藩に提出されたものの写しで、薩摩藩は越前藩のものと内容が同じかどうかを確認したのかもしれない。但し、(3) の写しの可能性もある。

重要な点は今回の盛岡藩公用日記の中で「卯五月幕府え建白」と付記されていることである。

つまり、これまで建白書は越前と薩摩の二藩だけに提出されていたと思われていたが「幕府へも提出されていた」ということ。これを受けて赤松建白書の提出のタイミングやその目的を、当時の時代背景と合わせてまとめると次のようになる。

赤松が建白書を提出した時期は、慶応3年5月、越前藩前藩主・松平春嶽の日記「京華日録」（けいかにちろく）によると春嶽宛は同年5月17日、薩摩藩や幕府宛もその前後と思われる。

一方、同年5月は薩摩藩（島津久光）の呼びかけで越前藩（松平春嶽）、土佐藩（山内容堂）、宇和島藩（伊達宗城）の四侯が京都に集結し、いわゆる四侯会議で、（1）長州寛典（かんとん）（長州への寛大な処分と藩主毛利父子の地位保全など）を実現したのち、（2）兵庫開港を幕府ではなく朝廷の名において実施すべき、ことを確認した時期でもある。

四侯（容堂は病欠）は同年5月21日、二条城で将軍徳川慶喜と会見し、慶喜は翌22日に参内している。赤松はこうした四侯や慶喜の動向から「天幕御合体」（てんぱくごがったい）や「諸藩一和」（しょはんいちわ）が実現する好機と見て幕府や薩摩・越前両藩へ建白したに違いない。

しかし、結果として四侯の要求は慶喜によって骨抜きにされた（兵庫開港を強調し、長州寛典はあいまいのまま）ため両者の関係は悪化し、薩摩は長州との武力行使→倒幕路線に舵を切ることになる。同年8月には、薩摩は長州に「三都（京・大坂・江戸）同時挙兵計画」を打ち明けている。（→未遂に終わった）

赤松もほどなく建白を実現できない厳しい状況を悟ったようだが、同年9月3日に暗殺される直前まであきらめずに「幕薩一和」（ぼくさついちわ）のために奔走した。上田の兄・芦田柔太郎宛の書簡（同年8月17日付）によれば、赤松自身が薩摩の西郷吉之助（隆盛）と会ったり、幕府方の梅沢孫太郎（幕府目付）や永井尚之（尚志、若年寄格）と接触している。

2. 赤松小三郎と薩摩藩・会津藩、そして暗殺

赤松と薩摩藩の関係は、薩摩藩が赤松に翻訳を依頼した『重訂英国歩兵練法』の翻訳・出版をきっかけに強固なものになった。当初薩摩藩は赤松を鹿児島へ誘致するつもりだった。その後、江戸留学中の薩摩藩士・野津七次（のちの道貫）が招致を交渉し、慶応3年（1867年）に赤松を薩摩藩京都藩邸に招聘する。赤松が開いた京の洋学塾には薩摩藩士だけでなく、他藩士や新選組隊士まで詰めかけ、塾生は数百人に及んだという。

一方、会津藩は赤松の上田帰国を阻止するとともに、赤松の有能に着目し会津藩もしくは幕府への召し抱えを図った。また赤松は会津藩の山本覚馬と連携して「幕薩一和」の周旋を行った。

このような状況下で、薩摩藩が四侯会議の破綻後、長州との挙兵路線（幕府・会津との対決）へ転換すると、薩摩藩にとっては赤松から薩摩藩の情報が幕府側に漏れることに関しての危機感が生じた。赤松はおそらくそんな事情を知る由もなく、知らぬ間に虎の尾を踏んだのかもしれない。いよいよ赤松が上田へ帰国する直前の慶応3年9月3日夕方、赤松を「幕奸」（幕府のスパイ）とみなした薩摩藩士・中村半次郎（のちの桐野利秋）らによって京の

東洞院五条下ル三丁目和泉町で暗殺された。

3. 『京在日記 利秋』について

桐野利秋が記した『京在日記 利秋』は、実は2冊ある。桐野作人氏が桐野利秋の妹の子孫・伊東さんと知り合いで、伊東さんによるともう1冊を大正から昭和初期に活躍したジャーナリスト・伊藤痴遊（ちゆう）に貸した（借用書もあるという）が、痴遊は間もなく亡くなったこともあり返還されず、その後近年では一時NHK図書館が保管していたようだが残念ながら今は行方不明とのこと。もし見つければ、おそらく現存する日記より前のことを書いていると思われるので、桐野が赤松と師弟の関係を切るという話も載っているかもしれない。

4. 赤松建白書と福沢諭吉『西洋事情』との関係

赤松が参考にしたのは赤松が建白する約半年前（慶応2年秋から冬にかけて）に出された福沢諭吉『西洋事情 初編』だろう。赤松は、共和制の合衆国を基に日本に近い君主制の英国を参照した。実はこの時期、他にも雨後の竹の子のように新国家構想が公表された。主なものを三つ紹介すると、①大給乗謨（おぎゅうのりかた・老中格）の案（慶応3年10月18日）、②西周（にしあまね、慶喜の政治顧問）の「議題草案」（慶応3年11月）、③稲葉正邦（老中）の案。いずれも幕府に近い立場にて、将軍の地位が高く天皇の地位が低い内容であり、大政奉還後の体制としては衣替えに過ぎなかった。一方の赤松建白書は天朝第一義で中立的だったことが特徴。

以上

赤松小三郎研究会事務局 荻原 貴（79期）